新式助語字譯

序文
總論上
首

內務省圖書

號　　　第
類　　　部書
函
冊　　　一　共十三

和書門
類　三
號　二七四三
函　八九
架　一三
冊　一三

內閣文庫
和
類
號　三七四三
冊　一三
函　二三
架　一三

38

內閣文庫
番號　和 27433
冊數　13（ 1）
函號　203　38

203-38

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

明治十二年購求

衣

きはめまゐりける此山寺を住家とし
所かれをゐてしえて水の
松あをき山老しまてをとゝろく
て川をゆき流れ行といふ浦す
ゆひよりもかの年をうけのはき

まれして昔人のこゝろ残しおきを
つくりおきたりしもさながらのしとなる
時のうつりに變ことはことなるまゝ多くて
後の世の工匠とものよく釿にもて
力をいれ種てつくりしなかなか長押椽

作る八闘なとよろしとおもふハ誤なり
世の人のなそいふ多りさかき壯大厦
移しりよ傳ともに光こそやくハあり
にてかの四町をしるすもの残しおく
出なるましり形ハ世にあるさハ残へ皆きそ

然るは従ふ所の心にかなふ人を
たのしみ其思ひを捨むる程あれは
こそ友達といふめれ河
日もあまねく雲霞をわかつ如くなる
すまひ也と自警ふかけれは尊

詩匠のいへるなる友ぞあるべき
かれなきつる人に梁太夫などいふ
いかなりけむ友とむすひし傍らの
以を知てたしや文章ふかり
いふに進士になりて揺めかし

以ゑ大学の君にハあそて大六の
ごといはせそへつらぬ廣道に
らふ本に纏墨の正しうらぬ
をゑことを筆となめらして
初屑のあとゆれ多涙速の

大塊にあそしはせ

久貝因幡守正典朝臣

誠善堂主人

むかし此物語ハこの今の世のこれはなもの
これら此おほかる中にも源氏此物かたり
ちうわめてたきハあはれさるゝことよ此物語ハ
人まさまさのいひはしめえらまてるまゝ中なれともいふ
も文なるものからそれやまとめつゝいふ
しへ今ゆくさきにもさとくなかるゝかる盛き
書此さけ書るをいあのまにしてこのうゝ此

みやひとさまれしなんまた歌をもむかしもめてく
うくまくれ物のちんとなる盛さまるとものこの
物語ハさもまてハいつさわ字わ法まて
志け山の奥に入る水京此かんさるころ
乃みちまつ山の流れのとほしらく氷に結ふの
なきけさうぬれやんとなれたその上人
まとものおかくさまくいふうれ絵へるものとの

いとおほくそれ〳〵のくまてうたに花ろうまれまて
ゆきかはるとしまていふるまていみしれもの
き〻しれるちうさくとも、かそふるにたつおよひかたく
おほえたなかれぬたつのあなん、いかなるはるは
せうさえのいさゝめぬゆのあきつねてふうき
道かゝまむとものゝえむさし野のえ
かきのあまえおもふゝきの人しめしとそのまは

なをわかしおのまゝあてまはえなけれしたゝよか
このおのゝうたは、いふらめそくつのくわちあつ
はるのあくまたむとえすれとはつまれ南あん
おほよなとまゝえのたつよゆきまむたゝち
のこせられくいとあめくさゝなりもおほ
このわらはむらよのまれちうさくとも我あ
まめくり今をかんくてあくいくのくかとん

国立公文書館 National Archives of Japan

なくよせことしつゝよるかぬさてなん山の
せい川る秋の月にはそへるにたるむかしと
よれおかちて法すりにまはいられぬもの
からうれ光の寺になしぬきんふと見んおと
はくたのあられ粉かよう源さまいてい
く見しき所くハおほつのわしはなる
法まくよのみか世をふるふかのちうさくとれ

もれ半をくつわきんすゞれつきをようかたれ
中の主てつる方とゝめのさらふうやうちゝる
梅の花くふくもあをせうにおほゆきれ
さゝ糸をとよ中をつふらつゝよかきは
字ゆふるとえせ見く志まし記とあさま
はひふゝ中たのこ主をとむをよつゝまなし
て板よ志つきんとふふいてのおかけなく

はるとはなといひくかいやかつあめのなきと
まろいとせまきそのはまてつひまて
こゝろひの色更かく志とけなりすはくみ
末とハれすぬ法を吏よの拙浅人にとひ
たゝのかみうとふしとあしく人もちおろの中る
むかしつふおもひのまつくものつくれ
まこかがすみのことハおほりんとし

ふうまつの井にもさそつのみ法つのぬしの
んふうのうち拙せられても文の詞をも法し
いそくおたゞしころうくもよかにむきさるさとひ
こにも法れかうよいすくりつくうつしかき
まもられそいとさこの法しのかなつて八
そこふとふうふるまとたつくきとものかめく
なの川の絵ろこにまへかいそちなんかれと

はみさかとこつれくおほ由遊ともとく
たらうえむまほしくすゝみきこえられしをもとも
さる過ハのかゝとくハ書そへてつらなれは
見ん人はゆるしたまへかしとなむ
てよのし

嘉永七年正月二日

萩原廣道

校正譯注源氏物語評釋首卷目録

惣論上

一 源氏物語といふ題号の事 一丁
一 紫式部の事并日本紀の御局の事 二丁
一 時世のありさまの事 六丁
一 此物語称誉の事 十三丁
一 此物語の歌の事 十五丁
一 作者の用意の事 十九丁
一 物語の心ばへ并物のあはれをしるといふ事 廾一丁
一 一部の大事といふ事 廾七丁

惣論下

一 此物語注釋どもの事 四十丁

一 引歌の事 四十五丁
一 准據の事 四十六丁
一 巻々の名どもの事 四十八丁
一 人々の名の事 同
一 紀年の事 五十丁
一 系圖の事 五十二丁
一 此物語に種々の法則ある事 五十三丁
一 なにくれのことを書る所の事 六十六丁
一 頭書評釋凡例 六十八丁
一 本文譯注凡例 七十六丁
已上

校正譯注源氏物語評釋首巻

萩原廣道著

惣論上

源氏物語といふ題号の事

源氏物語といふ名の事ハ。本居翁の玉の小櫛に云。大かたむかし〳〵の物語の名の例。おほくハ其中に主としていふ人の名をあてたるが多く。此物語もそのでうにて。光源氏君の事をむねとしてかけるなれば。源氏の物がたりといふなるを。さて物語の名。光源氏の物語といふべし。されど源氏物語といふべきにはあれどいふ人あまたさしもあらしをあはれなやくかりぬしの日記にも。ただ源氏の物がたりといへるをや。といはれたり。此説のごとし。さて源氏の名ハ。岡部翁の源氏新釈に云。國史また新撰姓氏録などを按ずるに。嵯峨天皇弘仁五年に。皇子信公以下男女八人に始て源朝臣の姓氏を賜はりて。左京に貫を附しより。皇子に氏賜

さるにても源氏なり。諸抄に此時三十餘人に始て源氏を賜るといへるは委しからず。
はじめ八人にて。次々に三十餘人には給はりてし。といはれるがごとし。源字の事は舊說に
濫觴は水爲九河之源の義に祝して用るとあり。よつて伊藤長胤が秉燭譚に云。北魏
の時。源賀に始て源姓を給ふ。源賀は禿髮魏の宗族にて。源を同じうするに因て始て源姓
を賜ふる。源賀が傳にあり。本朝にても源氏は皆宗族より出づ。同一義なり。といへり。
かの國此史を考ふるに。げにも此事ありて。源賀禿髮傉檀之子也云云。太武謂曰。卿與
朕同源。因事分姓。今可爲源氏とみえて。さりけれど此說はいかがあるべき。嵯峨天皇
の御時は。殊に漢籍をおもくせられしかれば。委しく議定せられて。北の狄が同源の義
に依るにはあらざるべし。さればこそ源氏をば殊に重うしおもひて。皇子の氏にあてて賜へる
例となりぬるは。嵯峨の御時はじめてされ。跡は因みなるべし。さて物語といふ事は。
和名抄に云。中むかしのあなどり物語といひて一くさのふみあり。物語とは今の世に
ものがたりといふとおなじ。されどもちがふなるべし。日本紀に談といふ字をぞものが
たりと訓ぜる。それを書に名づけて作れるとは。繪合巻に物語のいできはじめ
のおやなる。竹取翁にうつぼの俊蔭を合せてとあれば。此竹取やはじめならん
なりけん。その物語もいつの代に作れりとは知らねども。いとふるき物と
みえたり。延喜などよりはこなたなる物とぞみえたる。さてもろもろの物語の
さまは。おのおのすこしづつかはりてさまざまなれども。いづれも皆世にある事を
かるよしにて。或はいささかなる事をよりどころにして作りたるなり。そのうへ
てとりた。あるはそら言をかきしるして書たるは。みれがつくりあり。
又まことにありし事をそのままに書るもあれど。やうやうなる中にまじりて多くは
作れるものなり。かくていづれの物語も。男女のなからひの事をむねと
おほく書るも。よりは歌の家の集などにも戀の歌の多きと同じことわりにて。
人の情のふかくかかることは。戀にまさるはなければなり。といはれしがごとし。
なほ下なる書をみてしるべし。

国立公文書館
National Archives of Japan

紫式部の事并日本紀の御局(ミツボネ)の事

此物語作れる人の紫式部なる事ハ、みづから書ける日記にも見えたれば、動くまじき事なり。此作れる事につきて、昔よりさまざまの説どもあれど、いづれも後より推しはかりていへる妄説(ミダリゴト)なる事を、紫家七論・源注拾遺・玉の小櫛などに委しくいひ尽くしたれば、ここには省(ハブ)く。さるハ妄説(ミダリゴト)どもをいへバ、皆無用(イタヅラ)なる論なれバ也。さて作りぬしの系図ハ、舊注どもにも見えたる中に、安藤為章の紫家七論なるハ、殊に委しく考へたるものなり。父ハ正四位下越前守藤原為時朝臣とて、閑院左大臣冬嗣公の子、贈太政大臣良門公より四世の孫なり。母ハ常陸介藤原為信朝臣の女(ムスメ)。夫(ヲット)ハ左衛門権佐藤原宣孝朝臣とて、同じ良門公の五世の孫にて、勧修寺家の祖なり。さて宣孝の北方となりて、大弐三位(女子名賢子)と、辨局(名不傳)とを産(ウミ)て後、長保三年四月に宣孝卒(ミマカ)られしかバ、四五年ばかりやもめにてすみしに、寛弘二三年の比より上東門院へ宮づかへに出られけるさまなるが、まさに此物語作られたるハ、そのやもめずみのほどなるべき事、まさに萬壽二年の比までハ存生にて、上東門院に仕へまつられしさまなど、委しくかの七論にいへれバ、ひらき見て知るべし。此人実の名ハ傳はらず。紫式部といふハいとある呼名(ヨビナ)なること、玉の小櫛にいはれたるがごとし。さて紫式部といふ名につきて、説(トキゴト)ども多かる中に、河海抄に紫の上の事をすぐれて書き出でたるゆゑに、藤式部の名をあらためて紫式部と号せられたりとあるを、七論又源注拾遺などにハ取られず。玉の小櫛にハ、袋草紙に一條院の御乳母の子なり、上東門院に奉らしむとて、わがゆかりのものなり、あはれとおぼしめせと申さしめ給ふに依りて此名あり、式部ハ父の官也とあるをとられたり。さてこの二つを、おのれ思ふにはみなまさまさるやうなり。紫式部日記に、左衛門督(公任卿)あなかしこ、このわたりにわか紫やさぶらふと、うかがひ給ふ。源氏にかかるべき人も見えたまはぬに、かの上ハまいていかでものし給はんと聞きゐたり、とあるをいはでもしるし、契沖為

章ハ、こまつよりかてかの河海説に澄(アカシ)とせしまへらする紙に標するにはおなじの説
にようり時ハ、紫といふ名ハ此紫の上にハあづからぬ事なるを、それとよく〳〵
のさまへるぞ無益なる。すべてさらふれたハ、なつかしとめづらしにようそへていふ
をとて与とハ色をなまさく。といひまつらす。今案(オモフ)にまづ河海よ藤式部をあ
らためて紫式部と号せしめたりとあるハ、上東門院の号しめへるこそまる
世人の号しめるこそとさだまりたれど、まづハ上東門院の号しめへりといふや
うに心得させかしさるさまなれバ、それハ誤なるべし。大かたこの呼名(ヨビナ)ハ、式部まで
侍従少納言などいふ類(タグヒ)にて、ぶつしも係ル事がらよりてハ主(ミウ)よりも給ふ
べきものなれを、その上に冠(カウフ)しせたる紫ハ、和泉などいふ類ハ、皆他(ヒト)より呼分(ヨビワカ)ちたる
名とやいふなり。此人もそのはじめハ、江侍従清少納言などのごとく、其氏によ
りて、藤式部といひしとならまたきこまを別ちその呼名(ヨビナ)なりけるを、此物語
作り出て後に他(ヒト)より称(ホメ)て紫とハかへらしせつらんとぞおぼゆる。かしくハこの

ハ公任卿の紫のゆかりにもてハやさるなどやその始(ハジメ)ならめん。よしさらばとも他(ヒト)のつけて
呼けるが、何となく弘まれるなるべし。是等ハ、めし紫の上の事をとぞものせさせて書(カキ)
たる物名よりて紫といふ名を物しけバ、そもそも我身やがて紫の上に擬(ヨソ)へしまゐらするが
ごとくなればものなまさバ、かの用意ふかき人なれバ、必(カナラズ)辞(イナ)びまうすべき事なり。一條院
の御乳母子なる故をもて、たゞ名づけのもなれバ、これハ誰にもしたるもさなれバ、
うるさく甚(イタ)く辞(イナ)びまうすべきを決(ウツナ)し、そのうへ帝(ミカド)ハもとよりの君なりとのたまふ
とも、上東門院の、それをやがて御めづらしめ使ひたまふ女房の名に付たまひ
ぬらんも、いかがしきまてありなまして、世人のよしと呼んハ、いかにもかしこきわざなれ
まさバ、紫式部とハいふまじきなれども、さまで紫で藤式部とのたまひしを、我
と紫とまうしもあればこそ、かならず人のおほひにせよ、他(ヒト)より紫とハ付けるなるべし。
付てたゞ初めハ、ことなる名につきたりしも、何となく呼名のやうになりては、
おのづから藤式部のなどまぎれて、紫とのミいふやうにハなりけんかし。

小櫛にかゝれし云は、あらぬ事をめづらしげによそへていひたてゝ奥とは
きこえ奉りしといひならはせるを、おとゞの見たまへるごとくも、初(ハジメ)より此人に紫といふ称(ナ)
ありしならば、此物語に紫上の事をかうあれていみじくは書べくもあらず。
もし若しからば、源氏のやがてそれとなずらへるさまに書べきことなればされど
於紫上の事をすぐれていみじくかきあげるなかに他(ヒト)よりおしてむらさき式部とは
つけられたれこそ、物がたりなれ、紫上の事はさらにもすぐれていみじくかかれ
たるふるこの物語をも、やがて紫の物語と、更科日記には見えたれば、契沖の説の
ごとく呼名のおこりもそれに因(ヨル)ことは、先ぐさきがたりなれとぞおぼゆる。まづ
袋草紙の一説に、若紫の巻を作れる、甚深なるゆゑに此名を得たりとあるは、
先なるまでのがれざりしごとく、ひがごとなるべし。そもそもかゝるやうの事は、今と
なりてはよくもしれぬ事なるに、しひて引出ることわるべき例証(ショウ)もなければ
ことなれどぞ、実(マコト)にはいかなるさまなりけん。されどその事情(コヽロ)をおして、[illegible]よ

いひさだむるなれば、いづれもまさしくあたるべけれ。凡人撰(エラ)びてとりもちひし。
さてついでにいはまほしきは、かの紫式部日記に、左衛門の内侍といふ人侍り
云く、うちのうへ源氏の物がたり人によませたまひつゝきこしめしけるに、この
人は日本紀をこそよみ侍るべけれ。まことにざえあるべしとのたまはせ
けるを、ふとおしはかりに、いみじうなんざえある[ろ]と殿上人などにいひ
ちらして、日本紀の御(ミ)局とぞつけたりける。いとをかしくぞ侍る云々
といふことあり。これによりて、藤井氏の日本紀御局考といふ物の一巻あり。
其おもむきは、この日本紀とあるは、日本後紀、續日本後紀をさしてのたまへるよし
をいひて、書紀より續後紀までの四つふみは、同じ名なればなるは、國史の事を
日本紀といひつたへしよしを論ひ、さて源氏君を嵯峨天皇に准(ナゾラ)へたるよしなり。
次に、作中の人々を、当世の人にあてて准據を考へて、日本紀をよく読た
るよしをのたまへるやうにいはれたり。然れども此一部の文本によりて実因(タガヒ)

あるひとかの御局考にいはく日本紀をこそよみたるべけれとしてふまへてあるはさ
るよしも有しにや、もしくは本によりて讀べけれとあるを見て、帝より式部を
讀とはのたまはしく、文讀べとおのがうへにつけていふ言として語格の自
他をわかぬまじバ誤なりと見て改められたるか、それはしらねどもよみならふべけれと
いひてはざえあるべしといふにかけ合ねがごとし。さるは既に讀なる言あればべし
と末をうちつくいへるにやあらん。文べしを推量りなる言として俗言にざえが
アルデアラウといふ意として八次の詞におしうつりにいみじうなんざえあれ
ざえのしたにらりしある本ハ行あるなり と後人などにいひちらしてとあるはかるあらバさるはまこ
とにざえあるべしとのきまひさるを、いらざうざえあるといひたるは、いささか云
のうはきるをくふく。事のすぢハ同じうれバさバかり違べるにあらざれバ、
案ずるに語のうへハそれてかねが若此例と見て此物語の古き写本ども
にいさまても流るる本もあれ。されバあしくまなぶべけれとよむべくあらずさて

帝よりの式部を語ぞとのたまはせしハ後世にはあらはにもあやしかる
やうなれども世々の詞にハさる例ども此物語の中にもこれかれ見えた
まじバされさして特ぶべきにもあらじ。かくて言の意を、此人ハ日本紀を讀
べしさらバまことに学問あるべしとの意へるにて、ざえハ例の学才ゆゑのにて
今の世に学問といふにあるべし。ハ今によりの後出来べしといふさまにくべくよれもべし
も共に末をうけくいふ辞として皆出べし。それで故左衛門内侍の、いらざう
学問ありとのきまへるやうにいひなうめて後上人などにいひちらしてかく
るあだ名はつけたるをいかにもいきどほしくなるべし。かくらんざまバ事のさ後
本あひざうしされども日本紀とある涼書紀のことにあらはすべて國史を
日本紀といひあるくるやうにいひきれしは事がら実にさるあるべくぞおぼゆ
るこの論もされたるにあまじバまことにいふがあらん例の人さびあてよそて
かく日本紀の御局とつけるにても其世に人のさぞなつけたんあるべしを

おもふべし。猶他にもあるべし。

時世のありさまの事

此物語をよまんにハまづ其時世のありさまをよくよく考へ弁へて読べし。然らざれバ事のさまいたく違ふ事ありて。後世の人にてハ考へ惑ふ事おほくしてうたがはしく思はるゝことあるべし。時世とハ此物語作られたる一條院の帝の御代の事なり。紫家七論にいへるごとく。此物語ハ一條院の御代長保の末寛弘の始。紫式部寡にて里に住ける間に書たるなれバ。大かた違ふまじくおぼゆるに。物語のさま。其の世に有し事のやうにハ出来たるものから。すべての事のありさまハ。其世にありしものにて書たり。と見えたれバ。作者の在世のありさまにて考ふべきこと多かり。そのありさまをうかゞいしらんに。先我大御國の上古ハ。神武天皇。大和の橿原に大宮を建て。天下をしろしめしたる時。神代ながら御制度のまゝに何事をもおきて給へりと見えたるに其制度ハありけれど。大かた今世の御制度にちかく。朝廷に仕へ奉るを伴造といひ。諸國にて地を領へるを國造といひて。おのおの生まれながらにして。其家を継其職をも継て。幾世ふれども遷し変らする事ハなかりしを。（これらのよしの委しきさまハ上古政迹考にいへれバこゝにハ略く。）推古天皇乃御世にいたりて。もろこしの冠位儀禮のさまを模し給ひ。孝徳天皇の御世にもろこしの郡縣の制度を模し給ひし後ハ。そのさまいたく変りて。大かたもろこしざまにぞなりにける。（これらの委しきさまハ日本紀また令格式の書をよみてしるべし。）そのあるやうハ。日本を六十餘國と制め。國の下に郡を置。郡の下に郷を置。郷の下に村を置て。おのおの其吏をさだめ。朝廷にハもろもろの官位を制めて。萬の事を司る所を置て。各其吏をさだめたまひ。其官につかしむる位の階あり。又その官位につかしむる位田職田とて官位の禄あり。かくて朝廷にまぢかく仕奉る人たちハ。其官位を賜はりて。次第に高き階にも昇りゆくなれど。官位ハ其人の一世かぎりにして。家を世々にし

てハ傳へぬ御制度なりしを。また國々の司ハ。京より出て年を限りてくだりて移ろひかはりつゝ其國を治めらるゝことなりし。是いはゆる受領なり。郡領より已下の吏ハ。大かたその國の造縣主などのながれにてもありしと見えてさることまでも年限などもなかりき。されども元来その地に住せる人なりけれバ。後にハ世々其職を継げるさまなりき。さればいと卑しき吏なれども。威権ハこよなかりけるなどもありしとぞ。大かたかくのごとき御制度にハありしかど。我皇國ハ神世よりこのかた氏姓を重くし。家系をいひたてゝ。貴き賤きをわかつ國風なりしかば。その御制度ハ御制度として。やうやくにうつりかはりて。此一條院天皇の御世のほどなどになりてハ。其職に任ぜらるべき家々も大かた定りたるがごとくなりもてゆきしかバ。さても官位ハ一世かぎりの御制なるがに。その官位につきたる禄もまた一世かぎりなりしかバ。世嗣のうせたる時などにハ。いとく困をすべきわざなるに。私に田など買て。家のたくはへとせられたる。是を庄園などいふ。今の世にも某庄といふ名のまゝに遺れるハ。其人の庄とありし所にて。皆私の領所の跡なり。源氏君の須磨。八宮の宇治なども。その領所めきたるやうに見えたるが。かゝる光景なりしかバ。帝の御子とまうせども。さるべき御後見などのあらざるハ。いと貧しくして人げなきさまなるも。おほかりき。常陸宮の姫君宇治の八宮などのさまにても知るべし。さて官位に昇ることも。貴き家に生るゝ人ハ。その父祖の庇陰によりて最初よりさるべき官位にもつきのぼれど。地下といふより下ざまなる人ハ。さやうの憑もあらざれバ。其時々に権威ある人の家に私にたよせ仕へて。其労をつくして朝廷につかうまつるべき種子として。官位をも申請ひ。後々までも其家の庇陰によりて高き階にも昇りたるなり。されバ朝廷の御臣とも権威ある家の奴とも分ちがたきさまなる人どもおほかりし。其摂関のうちにても帚木の紀伊守。夕顔の惟光などやうの人。皆さるたぐひ。これ上古に

も今世にも絶てなき事なれバ、その勢ひいと／＼奢なる事どもおほかりし。又位なるべきまゝ住所のさまも左京右京のうちに定まる宅地を賜りけるやうになりてありしかど、其始祖などのさ備にてハ、ことに厳かなる事どもゆゑ、富栄えてしる人などハ、已が宅よまかせても宅地を買とり、或ハ人に譲り、又貸しくなりしバ貴などもせしかり。他しまにもなりしかバ、大かたハこれも勢ひにまかせ家にまかせて、何處へも移りゆきし事とぞおぼゆる。されバ公卿よりおほんなるハ世の代る時などハ、さるべき人もあらざりしバ、いと流落ることなどもありて、其勢ひのさ備よりてハ、いかさまにもよろしきによるべかりしバ、おのづからさやうにハなかりしかども、まして婦人などハ、さはさ備に浮き漂ひて、所縁につきてさしもぬ人の妻になる類もありと見ゆることかの子孫などのさ備にてあるべし。さて又いと上古にハ氏姓の系を殊に重くせしなりしかバ、皇后に立たまふハ大かた皇子の系にかぎりしかりしを、後にハやゝうつろひて、大臣の御女なども皇后に立たまふもいできて、皇子など産まゐらせたまへバ、御外戚がらもその御ゆかりにつきて上なる位にも昇りなどしたまひ、さらぬ公卿の御女たちも女御更衣に召されたまひて、皇子うみまゐらせたまへバ、同じく御威権のいでくることなりしかバ、いづれも／＼息女をいつきかしづきてみやつかへに出しまゐらせんとせられたりし當時のならはしなりしき。桐壺更衣の御父按察大納言のきさきをまちしやう、明石入道のかしこまりたる思ひつゞけたりし事などにて知らるべし。これぞこの今世にはたえてなきことなれば、いとおもひのほかなることどもおほかりし。さて又夫婦のなからひなどのことも、上古よりそなどかはて、よりくる縁にのみまかせて、これハ本妻かれハ側室などいふやうに名をつくることもなかりしかば、されバそれ人のはうへにハ本妻とおぼしき人の二人まで、おはしけるもあり。

まづ妻とも妾ともさだまりぬ。數ひなどもありて、さま〴〵しくなりしなり。これ
今世おこなはるゝ諸侯の婚礼はさらなり。いかなる卑きものもそのおこなひをまなび
いやしき賤の伏屋まで化し、きそひてもみなさるごとく。同じけれど、そのさまなりけり
づ上下の品はあまたあれども、相偶ひて、よろしきほどの家に女をあはせて
さる事になりけるは、身をやりて、そのさま。これよりしあ　などか考へ。
まだよりあしなども見て、いみじくくらぶるには、むざしきをこそして
ひさぶるにいひよる。又媒をしてもんをたてゝ、ちらふにつひに事とげて
かよひそめ、後にはあらはに女のかたへむかへて住なども（す）るを、女の父母など
おやにてもよろしきほどの事なれば、初はちかづきてかはしておひ後にはその
婿に對面する對ひもあり。或はまづ男のかたよりかねをば出し、やがて
制せられもあり。又いとかたくなるには、女の身のまゝになどをしへてゆく
せしかども、おこなひとなりては、またまた身をおくるたより、此事は大なる侫のつゝむ

こともなく、その名れうへしなどのめでたきことまでは、ならぬいみじくいひはやや
して、總じてなることになりしさ事は、帝に奏覧せる世々の撰集にさへ、その
名どもに作者の名をとあらはしかくれなるなどにて見るべし。かゝるならひ
なりしかば、まことには案外なる事どもいでくめれど、それさへも名分を
守て、いひさだめたる妻妾といふ事もあらねば、たゞこの事はいとゞたゞ
曲事とは思はぬさまなりしと見えたり。されどかゝりしかば、まして、いと下ざま
にはさるべき事なれば、さるべきもありけめ。今世あらゆる諸侯の婚礼といふ
もさらにめでたきことにて、且かの國の後世の理學の論などいはあしかるんより見られ
ば、いともしくおもひよしある事のさまにて、彼がいはゆる淫奔の風なるに流て、上下
おしなべて不義なしぬはなしとて、そいはある。然れども、これは今世にしてさる
事あるにひとしくて、あしめ、世には、これするよの世の夫婦の道な
からば誰一人ひとりとて、あらむことはなかりし。かくいひても、今の俗

ハあやしくこそ。いひとく人に恥おもはでかゝりなるにか。かの夏虫の氷を疑ふ
ためしにてなりハぬるを見ゆて疑ふにおなじ。されども又男女のお
もひの正しかりしは今のさまとハことのおほく異にて。男女つねにあいめんせ
しことすくなく。止事をはゞかりておほかたのあいめんにも。疎き人ハ簀子におる
のみにて。やゝ親しきも簾を隔てたる人に几帳をそへて。或ハ障子をも隔
てたるほどにとゞまりておもひても。物あらきりんぞなりもなくありしたるとおもへり。
兄弟などにも異腹ある人ハ。なかにこのむらやうにておもひに面を見せたるを恥たり。
されば今の世の人ハ今ノ世のさまを見なれたれば。何ともおもひでみざるは
しく恥をしらぬ風俗とみておもあさましくおもへば。昔ハ昔。今ハ今。皇国ハ皇国。
あらじハあらじとして。今ノ世のありさまを疑ひあやしむべからず。
抑わが皇国ハ氏姓のすぢを重くせる國俗なれば。男女の縁もおもはぬ
よからぬ事をいひたるハ。さハぬ事なれば。いかに妄なりとも。

あやしくやうにまがひたる老の女などを。もたる人の側よりそへつくるなど
ハ昔ハいとかたくなりける。又事理をよくいはず。男ぞまづ女の家に通ひ
て妻問すべきことにて。兄も知らぬ女を先ヅ男の家にむかへくるなども。うち
うへなることなり。されば今の世に親迎などいふわざの見えたるハ。かゝるわ
ざることをも必ずなるべし。すべて男女の道ハかゝみに相愛でてあふべき
ことなれば。父母も知らぬ人を。おやおやぞくの心にあはずして
きて。おしすゝめるなどハ。天地のおのづからなることわりにあらねば。世の
世にハさぶらひしなるべし。又媒といふもの。世の中のさまざま人のさまなどよく
見知りたる女房などにして。世もかのいひよくうらしぬ人などつたへて。志の
せちなるよしをいひあはせる事なりしハ。人の心をやぶらぬことゝて。よく
いとあなるにおしと名づける人の媒して。世にきこえと厳かにいひきはまる中にハ。
さる一家のかぶひあく。男も女も添たる世のおもひとなるものもあるをおもひ

くらべて考ふべし。大かたそのころは時の帝と申せども、おもくもあらぬ女をあながち
にめでさせ給ふはあらじ。桐壺の帝は藤壺の中宮をめでさせまし。而よりさ
朱雀院の帝は秋好中宮に心ひかれ給へる事などを見て知べし。其外に
もかゝりし君のみならず、時の人はかゝる事のごとくなるまでぞ、まことにもさ
情(ナサケ)をさけざりけるなりしかりしかば、うちうちにはあへて咎(トガ)めずしてと
なども なくてすごしけるもとなりけるを、今はあまりにふたゝびおこるまる
事になりまでど、人の妻妾と定まる女をおしてもうばひなど、もろこしの
王(コキシ)どもがうへによくらべて、皇國(ミクニ)のなしひしなをみだし、大かたこれが
の事どもは今の世にはさはなくなりて、違(タガ)へる事あるらしく思ゆるぬ事ならんとは
をなんせて我國は禮儀もたゝぬ夷狄の如くいひあまでどぞれは皆
わろし。のふかきたくなみひなるふて國くおのかたなりしれ矢あるこ
とをさとらしぬゆゑきひがんといふべし。その中にも上にいへる天下お

御制度(ミサダメ)なども我皇國(ミクニ)のふりは皆もろこしのふりを擬(ウツ)させてつくらせ
又その男女のあひのさまは、もろもろこしざまを擬(ウツ)しなへるところなりし
かど、猶わがならひのまゝにて、今の事、又今の世の御制度は大らく孝德
天皇の御世よりあらたまりて我國ざまの御制度なる事。又今の夫婦は
定めは、もろこしの禮にならへるものなることを思ひ知るべし。猶いはまま
ありしかども八宮の事(コト)ども又今の別あるならはしにして、又人の首(ハブ)きしむるべく
此物語をよむ人の心つかひも、いつもいましむるとも、みだりにおのれよりて上にいへるが如き
ことをまもらば、あらくをあるをしるを示しおくなりしく時世のさまを忘
將てうかがふべからず。然ば源氏の源氏外傳にいへる思ふしても代よ
みるときは、後世よりみるとは治世の世によりて、その世には治世平和と云へども
その世の凶事どもをとりあつめて一所に出しつらねたる記をみれば、治世の
なりしやうにて、又戦國の記をとりみれば乾々軍ありていそがしきやうなれども。

世間多用の事業ありて、都て隙なるものぞといへり云々。源氏も一生好色
の人なれバ、やうやう見ゆるまでども、さありて人の交りもなりがたかるべし。
古への事をも見んずるには、其頃のおもひやりけるべし。といへり。まことにさることと
なれバ、こゝよりかゝげつゝ、おのれ常にいへらく、昔の書どもをよむにハ、心得べ
きやうあり。それハまづ國史または律令格式の書などハ、大かたうちひろげたるをと
バ用意して記し、又その人をおもむくる法などをのみ記されたるなれバ、
こまかにそよめバ、何事もいみじくかひなくて、さるがくに滞りなく行はれける
ことのやうにおぼゆるを、此物語さしぬるも其世々のうちとけ云の有様にか
ど、心見えバ、おもひの外にさぐへるなどめづらしさる條どもを彼此くよ
せし考へく、其世々のありさまを推て知るべし。すべて昔の書をよく
学問せらるゝにハ、むかしと其時世のあるやうを考へて、今の世にたぐへ
用ゐて益あるものども、知んなるまじバ、なかなかざりに見んハいとゞつかる

うるさし。よの中に漢学する人など、かの唐の経書といふ物をのみ常に見なれて、ひ
て、彼国ハ何事もすべてうるはしく足ひたる国のごとくいふまでにぞおも
ひとげ云ける書どもを見まじバ、いとゞあやしく思ひける事も多くして
かの経書などく法令教訓の書にいへるやうなることのみさながら行はれること
とハ思ふめり。されどかれよく知まじ。其中にハおのづから道理を考へる
なかにも、猶ちげさるなり。情なれなどもしぐども起まうし、さなれども猶あく
見て、よろづの有さまハ、何事の書を読んでも、ひろう知る文にこそ近む
ことなく、人情の有さまもあらそ深くおもひはかりて、其世のさまをさとるべし。
中昔の事どもあるさまを知るにハ、此物語などハ殊によろしき書なれバ、彼
正しき書どもに見合せて、其世のありさまを考ふべし。これぞ学問のもち
とあるべき事なりける。

此物語称誉の事

舊注どもいづれの抄にも此物語古来称誉之事といふ條(クダリ)ありてむかし
より人々の誉(ホメ)ましたることどもを記されたり猶またも皆くだかさそ
ばかりの外にてまことによくいはれたりとおぼゆるも稀(マレ)なりしかば玉の小
櫛にいはまほしき事のくさぐさ此物語のさまにいとよくかなへれバいささかここに
引いでゝよむ人のしるべとせん小櫛に云もろもろの物語どもの中に此物語
そことにすぐれてめでたき物にて大かた先にも後にもたぐひなしまづ
これよりさきなる古き物語どもは何事もさしも深く心をいれて書ける
ともみえず只一とほりにてあるはめづらかに興あるやうをむねとし
おどろおどろしきさまの事多くなどしていづれもいづれも物のあはれなるす
ぢなどはさしもこまやかにふかくはあらねば又これより後れ物どもは狭衣
などは何事もをさをさ此物語のさまをまねびて心をいれて書けりとは見え
ぬるものゝこよなくおとれり其外もみなこともなるもなしたゞ此

物語ぞこよなくて殊に深くよろづに心をいれて書る物にてすべての
文詞のめでたきことはさらにもいはずよにふる人のありさま春夏
秋冬をりをりの空のけしき木草のありさまなどまですべてかき
ざまめでたき中にも男女その人々のけはひ心ばせをおのおのことに
書分てほめたるさまなども皆その人々のけはひ心ばへにかなひて
一やうならずよく分れてうつれる人にあひ見るごとくおしはからるゝ
などおほかたの筆のかけても及ぶべきさまにあらずさて又よろづ
よりもめでたきことはまづかしこくなどはよにすぐれたりといふも
世の人此事にふかく感じふかく心のあはれをとらひけることはたゞ一とほり
のみこそあれいとおほく深きものとすすべて人の心といふものはうきふしく
に出るごとこうふにさまざまなる物よりはあはれに深く思ひしめらるゝにあ
ことにてはとやかくやとくだくだしくめゝしくみだれあひてさだまり

ぐらく。さまざまのくるみあやける物語なり。此物語には。ほとゝくぐらくしき
くまぐくまでのこるところなく。いともくはしくこまやかに書あらはしたれば。
くもりなき鏡にうつしてむかひたらんがごとくにて。大かた人の情(ココロ)のある
やうをかけるさまは。やまとからいにしへ今ゆくさきにもたぐふべき
ふみはあらじとぞおぼゆる。文まなべて光るの中に。めづらしくおどろかしく。
見さかしむるやうのことはをさをさなくて。ちかやかなるをえりすぐりまで。ことよのつ
ねのなだらかなる事の同じやうなるすぢなるをいひて。いとせちにふかく
なまでもよむにうるさくなげかるゝふかくうむことはなくて。きはだ
ちたるやうしくのふしでなげかるゝ。おのれぞ人子どもれにあふ。はやく
よりけ物語をよみとりてきらすること。あまたゝびになりぬるを。おなじ
ことども。はらだゝりもちらぬ。ぞぶに読ぶうむもまづるることは。さしも
あかれたまふて。年月をこそふれども。いさゝかもうむじでこそ。たびごとに

ちがめてよみくらむることもして。めづらしくおもしろくのみおぼゆるに
も。いみじくもてなしてめでたがる人あり。されど。おほよそめでぬとなん。といひ
てまたくかへすがへすは。世説のごとく書たるにかなんありける。その中にも。ぞのいたくめ
でたるやうに。人の心ばへをちくにそへてのくまぐまを出あらはしたるは。いみじく
いかなる漢文(カラブミ)にも。こよなくまさりておぼえける。今その由を案(オモ)ふに。漢
文はすべててにをはといふ物なければ。こまかなる心ばへなど。いといたく委
しくいひきゝはめんことは。かたかるべきことわりなり。さればこそ
ごとに義(ココロ)を含ませたる所に。上手の書る物なども。字の外に匂(ニホヒ)あるごとく
にしてめでたくゆるすこと。あまたゞすべてはいふなる自他天人ともに未妻
などのことをきゝはやうにいひかなへてあさましくして。いとおもしろかる物なれば。
此事は別にいひたる物あればくはしくは書つらねず。ふかくしたるをあげつらふのみ。さて稗史小説などいふ類(ト)にても。くはしくものす
などは殊にあかくしてうはべのけしきを他(ホカ)より語じるごとき件(スガタ)のものと

なまけり。こまかくめぐみのみどりたるにあり。家室の文もあそびするなかにて。
皆ただ事のされ心をのこさんとして。いとをこめかるあのたらねど。
此物語のごと委しくめでたきハさらになし。されバこそ此物語のことで。
漢文にもまされる宮風のおんとすべき物なく。ぞふにもやまと語
こしいふ人今の世くされにも比類（タグヒ）なき書になんありける。

此物語のおこれる本

玉の小櫛に云。すべて物語のおこれる事。伊勢物語などのハ。おほかたハ古きあな
まなバよしなき代。作りぬしのあらはふにみてたりとわかしきハよろ
ぞ。中にハえもいはぬでまうけるもあり。その外此古き作り物語ども大
かたのハことなる也。猶さらに此源氏の物語なるハ。みな作りぬしのよあ
るなるにまうさハをさなく見てぞ。みなよろしき中にすぐれたるも
まじまなり。物ハ源氏なるよりハ挟衣ぞよろしきといふ人もあまたど。

猶しかでさるべきものも。おのれ古物語どもの上にくらぶれバ。なほこよなく
くはしくなまでども。源氏のくはしきさまなることハ。いはれ。とりそへたる。
こまでもあされる評なる識。近世（キ）の物どもみども。いかにあへぬもまくあらく。
とやかくやかどもいひ。こまかにいとふよりて。本居翁の物をさへたるかなた
やうにいへるもあるハ。いみじきひがことぞ。それハ此物語の中なる物どもの
さま一ツの件（スガタ）ありく。八代集などの件と。いはでうかがひうる所もあるには
ちらたるなど。万葉集の詞をまづ。くてよむを。いふべきさまとちのやうなるに。
そまに新古今集れあるべきなどのさとうそへて。風教ありなどいふ数の事
何ハ事なる。さまざまくにハ。今人（ヨノヒト）のことにて。ひいふとよちらたる。やしげなる
事をさへいひてさとびたるへつらひゆる物などもありて。おのしくそてまどる
私説（ワタクシゴト）をたてしまんとてさる説（コト）をもいふまでにいふべきさまハこれいまし人の古詞
を深くもしやらしまで。此物語などをも。さぐうそへたるりのぞ見なんするのことにて。

いひしらぬ味をふくめるをとらへしらぬからに。さとびにひなびたるべく。妄(ミダリ)に評ずるにてこそはまことに此歌俗の哥なれ。大かた一ツの体(スガタ)あるなれ。から文をひらきむればあるまじくして。古へぶりあるはか後のさまなるありきすく。なるあかずくみなるありて。おのくこそ人の心手ぐしにおもへらるれバ。めぐくの体一ツとしておもふりのざることなし。そが中にも巧(タクミ)なると馥(ニホヒ)あるよハ。いひしらぬおもみにかなひつゝも。ありて文その一ツなる体といふも。そこのさまによりて。後(アトサキ)の文の詞にまかせて。ひゞきあるさまに詠(ヨミ)れしるなにより。この哥集どもに。一首(ヒトウタ)づゝならべて学ぶるとハ。おのづから差(ケヂメ)ありて。一ツの体あるやうになりゆるなれど。すべてハ別(コト)に得し体あるにそはれず。さる域をば一わたりよ学びとりて。そのまゝ称(ホメ)るべきをさへ。つくられやうにいひちらしはめるぞ。いとあぢきなくうらいはれたるなり。此歌俗のうちよ。哥のすがたを論ぜられるとゝ法のはるるをも見て。哥といふものゝすべてそのさまをもしるべく。又作りぬしの哥にうつくしうかし。なれどもよく弁ふべし。さて又本居翁の哥ハ此歌俗のこなたにあれバ。中昔の比の哥のさまをいとよく学びとられたるものにて。そのさまにおぼしく。おもほゆらし。きこゆなれど。ふるくてあるなるに。ふと見てもたゞしくしらぬやうにもみゆ。又まで。よく味ひ考へ来べく。ふよくうつしとられたる所ありて古へ人のふかくよみあへるものゝ。すべて近世(キ)によれる哥とていふをきけバ。一ふしあやしき事を考へ出て。此のあつまりしらぬ人の耳に。けぢかくとゞろかせて。心ふとおどろくべきさまの事をとりたるを上手とはするめれ。やうなれどとぞまぐす。このごろ。これさとびたる哥の定めにて。あまり実(マコト)に本(ホン)として学ぶべき古への哥に似たらんによりハ。今(ノ)俗の耳にハ疎(ウト)かるべきことわりなれバ。さらばかゝるされたる体に。まさらんハ。やゝいゝしかる人の体(スガタ)にそれなるべし。かゝるやうのものハ。わざといひもてなしさるゝものまでど此歌俗にあつむる事にもあらざれバ。こゝには略(ハブ)きつ。安藤氏が

此物語七論にもいへるごとく、物語のうち、和歌おほくひける詞ども、万葉古今伊勢物語などの古体をそなへて、しかもおだやかにて、やはらかにやさしく、おのづから吾国の風流をうつしつくされば、みる人をもしく傚ふものをえらざらしむる、まことにやまとぶみの上なきものなり、といへり。いにしへの文物語のむねどもをよく見明らめたる人の論は、誰も皆かくあんなるべし。さて又玉の小櫛に云く、此物語は、源氏の君をはじめて、よき人とする人の事は、何事もめでたきさまにほめたるに、そのよみおへる歌のみは、ほめたる所一つもなくして、よき人の他事(コト)は見えおほせて、歌は何しへやうにいへる事のみところどころに見えたる、そは此物語の中なる人々の歌は、みなみな紫式部のつくられしなれば、ほむればおのづから自ぼめになるがゆゑなり。(ここに其例どもおほく挙られたれど、今は略く。)みな作りぬしの卑下せんとてひかへていへる詞どもある故、むかしよりそこに心つくる人なくて、ただまことにその歌はよからぬやうにのみ注されし事

さるはいかにぞや。とありて、又見たるおくべきよし。小櫛に又云く、歌よむべき人とする人をまなばしむと知らば、此物語をつねによく見べし。此物語らにしるせる事ども、人々のよみたる歌どもは、ことごとく歌よむべきさまを教へたる。これらいふなるといふに、いふよしは、まづ人の情(ココロ)は、古へ今あらたまる事なき物とはいへども、世の中に時代のうつりかはりもあれど、おのづからその世中にうつされて、いささかかはれるところもなきにあらず。かくて歌も情(ココロ)の物に感ずるよりよみ出る物なれば、おのづから今そのみだりがはしきは、いかにもみだりなるべきことわりなれども、上つ代にてあきらかにむかしよりその歌は、しもひとしかるべきに今の人はそのころの古き物まなびによみいづるものもあれども、いにしへ人の歌のさまをまなびて、そのころのむかしによむものなれば、いにしへの世の中の人のこころばへとおなじからざるをよくしらで、いはれぬものばかり。又いにしへ人をまねぶといふ中にも、万葉の手よりいにしへの歌のさまとひくくしつる、その時まいでく物にこれぞ。

さしおきて、わかうたは古今集よりこなたをまなぶべきなるに、そのよしは
うたどもハ、みなみなむげにいやしく、紀氏以下のやうなるにハおよばず。されバ古への
うたをまなぶにつきてハ、中の代より上ざまの人の心しらでバ、その代の世中
をもしらでハかなハねども、さなから後今の世にして、それまでまなびしらんこと
よハこの物語を見るにまさることなし。いにしへの人の心しらでハ、歌を見てそのこゝ
ろにてハ、そのうたいでたる其の心ばへくはしくしりがたきを、しらざるなれバ、まことの物語ぶ
み物かたりにおもしろきを、此物語を明暮によくよくなれ、源氏君をはじめ
じめてよろづのわざどもを、よくとりあつめて、みやびたる人々よまじらひて
まのあたりそのことごと見て、その物語をきくがごとくにて、それ
しわざ心なれ、そのうちのまでこまかに見しりて、又そのうみたるの上の
心さまをもよくわかやかにするやむことなく見ちかしき事どもまで、雅（ミヤビ）
なる事のさまを今のうつゝに見れて、人に見るがごとくなれバ、いかにも人の

うたの出来る、其の有さまの心よくしられて、そのかみの歌てしるべくの時に出
きて、その歌をよみける人のこゝろハ、しるべくある物ごとやうにくはしくしら
るゝわざぞかし。さる故に、此物語に出たる歌ども、人々のよみたるさんなどん
そこと、ぐくうたよむべきさまぞんぞとはいとよく、さて此物語をつねによみ
て、この物語の中の人々の世中になりて、うたよむとぎハ、おのづから古のみやび
やかなる情（コヽロ）のうつりて、俗（ヨ）の人の情とハちがるかにまさりて、同じ花月を見
ける趣もことになくあはれ深かるべし。さる故近き世の人ハ、古への歌をまなぶ
とハきけど、古への人の世中情をしらでバ、其の情にうとくして、ただおのが今の
ゝ心にまかせてよむなる古によらで、ひく鄙（イヤ）しげなることのみおほくいでくる
ぞかし。ことにいまし此れ、ことゞ、実（マコト）にいとそれらる説（コト）にて、歌よむ人の心得
おくべきことなれバ、事の因（チナミ）に引出る也。然るは世にハこれやうにかくどとるかを
いそまてれバ、ひかし見えてしるべし。猶そのこの段（クダリ）をも又よく見ての僻ごとをいひて、

なげつまさるものあまたゞくだ／＼しくなればこゝにハ略しつ。其の学びざまを論へる事の中に引出て。悉く毎へいへるをみるべし。

作者（ツクリヌシ）の用意の事

紫家七論に云。凡才徳ともに備ふる事ハ丈夫もかたき事なるに。まして女にてハ大和もろこしいとも稀なるべし。こゝにいにしへより源氏物語を論ずる人皆紫式部が英才をのみ称して。其実徳をいはざれバ。物語乃本意もあらはれがたく。式部がためにおもはしからぬ事なり。為章つら／＼物語とむらさき日記とを以よく／＼て其家系をもとめ。其事実を考ふるに。やまとにハ似る人もなく。才徳兼備の賢婦なり。先ッ物語のうへにて。ひとつふたつをいはゞ。紫上のらうたくおほどかなるありさま。おもはずにして用意ふかく。明石の上はんさるあてやかにくらゐ高き。花ちる里のめの様にみをバ。薄雲のきさきのあやまちをとくいて。ちやく入内しまへる。朝顔の斎院はふかく名をゝしみまへる。

むらさきのうへ此玄よく人々のけしきをのがれ。総角の君ハ父宮の遺戒を守りとほすなど。様々の婦徳を記し。殊に宇治宮に。あまたある女をもてさげすみ。実なるをすゝめ。あだなる警戒をしめしたる也。されバ式部が心ばへてならひといへども。これもむかし物語によせて。みづからがしるしてもとあるはさざれバよむ人も皆此の物語やうたのことおもひ入る人まれなり。とへバ本人の歌辞ハ僵師がユヽあるましと決しざるがごとしとぞいへり。（此末紫日記を引いで論じて。其才徳のいみじかりしよしを委くいへり。本文あらはるべし。）また玉の小櫛に云。紫式部がかゝる人ハ此物語とかの日記とをあはせて考ふる人女の学問ざまとしてはしたなくさがなきをバいみじくふくみて。みづからも人にまさりおもひしと深く用意しける事は所々に見て。これ事ほかにすゞて男も女もよろづのことを。いふよりハおもふことのことわりかし。一つ二つの事ハすぐれてかくあるべかりけるといふまでの詞などこそ。これ学問ある人をふかくてきねん深く用意しけるなり。因ありて。すべてハ女といはむかしく心ぐるしも

みゝなもとむることぞ。ゆんにはまかるべしといへるハ。女とてもさばかりのことを。あとよりゝやまとゝもなべきことゝなまこべそまでよほひけるべけれどざふにあらずといふ。ひとくゞしくほこるんなれども。をせしせる文國字をふちなせのむすめ此事を。式部丞が読けるを。聞つゝもとくおぼえしを。為時がなげきしをしく。あまた語へるよし書る。此女のやうなるをかむかうなるにさバかりありしくいみべれハ見てざる紫式部。みづから学問だてをふかくつゝみかくされたるよ。ひとさらにいみじくしたしきものゝやうに。いひなしけるめのき。又きとめの記ま大学寮の試代あるまじく宇治ひねいひおどもをいひとも。おやしげに出たる。一具なればこそとこそありて。学問する者の優なるもねよし。然ればとさしてはいみじくいひなせる之はるハよの人此なり。ひきてべで何事ともおのがねをさかとむすぢのみをとバ。猶まめでよくなにさへにいひなさんとする事ぞなるに。みづからことに学問をねぢさがなかへりてうくようぬさ毎よいへる

事どもあるハ。人にしらるゝをつゝましくひまするぞ●とのたまへるうかゞふに此説どもにのたまへるごとく。此物語の中なる人々のよしあし。又作者のふつゝかなるよしあしをあげつらふハ。皆ことごとく似つかぬ此用意(コヽロシラヒ)なきハ。今さらにこゝは評ぎハ。その條(クダリ)ごとにふみめであぢはひ見んなバ。まさしく作者(ツクリヌシ)にひとしき心のやうをもはかりごとにいふべき事ども多きぞかし。

物語のむね〳〵并物のあはれを知るといふ事

玉小櫛に云。大かた物がたりハ。世中にありとある。よき事あしき事めづらしき事。おかしき事。おもしろき事。あはれなる事のさま〴〵を書あらはして。そのさまを絵にもかきまじへなどして。つれ〴〵なるほどのもてあそびにし。又ハ心のむすぼほれて。ものおもはしき時のなぐさめにもし。世中のありやうをも心得てものゝあはれをもしるべきものなり●とのたまへり。物語といふものを見るやうハ。げにかゝるものになんありける。さてこの源氏

物語ハ、いかなる心にて作りたまへるといふことの本意ハ、螢巻に源氏君と玉かづらの
君との、物語のうへの問答の中に、何となく書あらはされたるを、玉の小櫛に引出
て、其ことを説あかされたり。これまことにおのれ考ふにて、作りぬしの意をさぐるに
知らんにハ、たゞこのくだりにこのへ此書なんなかなか、其あやしきさまハ、かの書を見て
知るべく、おのづからさとるべし。螢巻にも小櫛の説をまづ引て説せたまへバ、今ハ省(ハブ)きつ。
さて又物語の中よりあしなどいへるを、よのつねの儒仏の書にいふ善悪
是非とハ同じからず、たゞ人の情(コヽロ)によしあしと定むるにて、物のあはれを知るを
よしとし、知らぬをあしとしたるも、小櫛にくはしくいはれたれバ、必(ズ)見る
べし。この事此すぢを知らざれバ、此物語見ても、其深きさんだんを知るによし
なし。実(マコト)にこの物のあはれを知るといふこと、物語のむねとある事ハ、この
本居先生ぞはじめて見いでゝ、委しく説述(トキノベ)られたるにて、いともくしきことよ
めでたき考になん有ける。されバ小櫛の二の巻ハ、大かた物のあはれのことを

のべ解(トキ)のべられたり。今その説を引出ていはんにハ、いと事長くなるをもて、
其要(ムネ)とある所を摘(トリ)て、いさゝかこゝにかゝげつ。委しくハ本書を見て知るべし。
さてその説の中に、あはれといふ言の本をとくとて、いはれハ見る物きく物
ふるゝ事に心の感じて出る歎息(ナゲキ)の声にて、今の俗言(ヨノコトバ)にも、あゝといひ、はれといふ
是也。たとへバ月花を見て感じて、あゝ見ごとな花ぢや、はれよい月かななど
いふ、あはれといふは、このあゝとはれとの重なりたるものにて、漢文に嗚呼などある
もじを、あゝとよむも是なり、といはれたるハいふまでもなく、やがてそのあハ、物に
感じてあゝといへるにて、古今さまざまにかはれども、それといへることハ、[illegible]物にも
見てかなふ所に、今の俗言(ヨノコト)にも、ゆるさるゝことなり。又しくハ伊勢などよりの方に云などもや、
いとあはれにしさきたれバ、たゞあはれといひて、歎息の声となりたるべき、此外の説
ハならべていひ出でし、小櫛に云ごとく、人ハ何ごとにまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべ
べきこゝろをしりて感ずるを、物のあはれをしるとハいふなど、物にふれて感ずる

催馬楽の言に
拍子のあるにハレ
とりこそあれど
今とハ別なり
又西国にてハ拍
節歌にてハテサ
テ云々とりふと云
世の人ハハレサテ
とやうにいふ俗
語にもあるべし
あるまじの云れ
かよう引いづべく
ハおかしからん

べき事にふれて心のうごくを感ずるとは物のあはれをしるといひ。心なき人とはいふ也。物の心をしらぬ人は、感ずべき事にあひても、おのづから感ぜではえあらぬ事なるにさへも、あらぬは何ともおもひわくことなくて感ぜず。感ずべきさまを書しるさねばぞうしろく、此物語は殊に人の感ずべき事のかぎりをさまざまに書あらはして、あはれと見せたるものにて、まづおほやけわたくしおもしろくをかしくさまざまいかめしきかぎりありがたき、又春夏秋冬をりをりの花鳥月雪のけしきなどを書しるして、出あるは見るほどにこそ、みれ人の心をうごかし、あはれとおもはする物にて、むかし思ふことある時は、涙こぼるる本意なるにても、いづれをもあはれとをかしと思ふとある所ござなく。（○猶いふべき次第は此物語の中なる語どもも多く引きたれど今はそがく おもひ考へてその心に得べし。）そもそも紫式部が本意とふかく物のあはれをしる心にて、あはれとおもふかぎりをかきあらはしたるにも、いふかひあるとはさしてもいはれず。又それをしりてさるものは、あはれふかくよろしきなりて、世の中のすぢにふれて、かなしくあはれなるかたにかたよれるやうに見なさるる事にて、くはしくいはば、いとよき事どもなりて、そのよきかたは物語のうへにいひもてゆかば、さらになにのすぢもはなれぬべし。上の件に引出ける考へどもを考へわたして知るべし。これまで此物語の大むねなり。さてそは作りぬしのみづからすぐれて深く物のあはれをしれる人にて、世の中のありとあらゆる事のかぎりを、よく人の心ばへしわざを見なれたりけるにつけても、あはれと思ひて、その心をよく見しりて、感ずることの多かるが、心のうちにむすぼれてはやる(?)かたなく、こらへがたきあまりに、作りたる物語なれば、さるすぢのことを書たる物語の人の上にかよはせて、くはしくあはれに書記して、此物語の詞にも、よからぬことにもあしきことにも、よき人にもあしき人にもいへることをよくよく見てよむべし。世の中の物のあはれの限りは此物語にのこることなし。さて此物語をよむ人の心にも深く感ぜしめんためなれば、何事もあはれと深くいみじく書なしたり。かかればこの物語をよむにも。

紫式部はおほくよのあはれかの人の此心へるさま人を論るをくはしくゆづり
ひらく文物語の中にふくめて、そのよしあしき人のありさまのおもむきを
考へこれバ、ちかく今の物をみんする時は、かやうにおもひはかるものゝのふ
ひとかしこき時のありさまやうなるものゝよしあし人の、此さまざまハかやうなるもの
わろき人ハうやうやしきものゝやうに、すべて世中のありさまなどべて、人の心此おく
のくまぐままで、いとよくあらはれて、物の心ばへ見えまへありてかしこくふかく
ゆゑ、人情世態によく通ぜんこと、此物語をよむにしくものあらじとぞおぼ
ゆれ。已上小橋 広道云、この論まことにさることにて、物のめでたき心を見るとかし
こんがごとし。さればつねていにしへより今の世まで、すべて古今学問とい[ふ]
ことする人おほくハ、ただ書籍にあらはるゝ事をのみ読みならひて、今の現在眼前にあ
ることをバさしおきて、ひさすら理といふものをさきだてゝ、何ゆゑもなく、その
理によしあしをなんとせまりてよぞもく学問といふものハ、古の事を学ぶも

のなりて古の事を考へて、その事々につくべて、おのづからなどの世中
のありさまをもよくわきまへ、事の成るべきやうをもおもひめぐらさんためなる
べきを、かの理といふものゝ味ハしらで、そのことにつきて、今日の自然のありさまに
さればかならずしもかなふものにあらず、かくしてかしこき学びたりとも、法申も書ぶらばあひ
たがふ事ハなきにもあらず。さるを強てその理にかなへんとてハ、さかしら賢ぶり
する所ひたすらに、むかしの人もあしぬまなどをも、偏にかたよりてかしこなりといひ
国あるまじきことをみづからしていひども、此大かた此世の人よりハ
いともしくあやしくこそありけれ、ひたすら事あるをもてぞいへる学問する人ハ
家をも身をも失ふものやうふさへいひしらぬあるハいとあぢきなく
ことぶらなんある人ハいとゆる人情世態に通ずるこの学問といふとの
時にあらざるなどういまさバ物語ぶくの数を見てくく人の情をよく
をなかりかく知りて、世中のあるやうをもさとり、さてよろづ

書籍(フミ)どもを読ば、一巻よみて一巻のかひあらんこと、疑ひなかるべし。ぐふ
そのうちにあるなかにハ、又此物語よりまさるものハなかりけり。昔宮木孝庸(タカツネ)
といひし人、予か君なりし玄旨法印に、世間の便(タヨリ)になるべき書(フミ)ハ何をか第一と
なしたまはんと問しかバ、源氏物語と答へられしとぞ。おしくハかゝるうへなん
事どもをやおもひはかりけん、このまへに物いといふをまりにしき事どもあれど、そ
れもまたよう別巻にいふべし。さて文字に称する人の情に感ずる事ハ、恋よ
まさるハなし。されバ物のあはれにふかくしのびがたきすぢハ、殊に恋ひよ
多くして、神代より世々に恋すぢをよめるぞ殊にわびしく
なかくすぐれたると、恋の歌よりぞ多かりける。又今の世に儀山(ミツ)ぐつれう
らふまでいくるまで、恋にすぢあるが多かるも、おのづから此事にして、
人の情にまことさへ、恋につけてハ、その心ばへにふかくしてうれしとも
かなし事もうしろさすもぢゝぶくしきことも、おもひたるもう

まつれることもある也。さて人の情の感ずるすぢハ、恋にまさる
恋の中によりてかくて此物語ハ、よの中の物のあはれのかぎり
を書あつめて、よむ人を深く感ぜしめんと作れる物なるに、此恋のす
ぢならでハ、人の情のさまぐ\/とこまやかなる有さま、物のあはれのすぐれ
て深きところの味ハ、ゆゐしらしがたきゆゑに、殊に此すぢを多く
物して、恋する人のさまぐ\/に思ひ乱るゝ心ばへのとりどりに、あハ
れなる趣を、いともくはしくこまやかに書しるして、物のあはれをつくし
して見せたり。後の世の人なれど、後成三位の恋歌をハ人よんもなかりし
まで物のあはれをしられよりぞあるとあるなりぞ、物語の本意によくあた
まつりたることく、(源氏云々此物語の中なるあはれの深くしのびがたきどもも此にしれしかれども、恋にもぶく、)上件の文どもに、あやしう此
なゝやとられながら、ひかさる(葵巻の詞)おもひ久しく経べどもうもなく(夕霧巻の詞)など
あるをめでて、此等の物のあはれの深くさへぐらんほど、徒ならぬあるべし。さまでぞ此

すぢにつけてハ、さるまじきあやまちをもいひいでゝよきかたにそむくるふる
まひも、おのづからうちまじるをばゆるく、源氏君のうへまで、ことに薫君の事、
朧月夜君の事、藤壺中宮の事などのごとし。ことの中にもさやうの事
ありがたく、たゞみづからなるすぢにハ、今一きハものゝあはれふかくみゆる事あるなり。
おとさしにいはれぬ事をも出来て、ものゝあはれのふかきにいはれたるをのせ
たるものゝ云々といへるにて、此次にそのすぢども論じたれど略く。其出せるに、此論もいといみじく宜し
かり。そもく恋などいふすぢハ、しも、今の俗の心にてハ、皆いとある淫奔放蕩
不義非礼の事をさしていふとおぼえてかく思ひたれど、そハ皆儒仏の
教に泥みてさる思ひをなせるものにこそあれ。実に男女のなからひこそ、
天地の神代よりおのづからなる道にして、さらに人の力にて禁む
べきものにもあらねば、生しいける物のかぎり、このことをしらぬもあらざる
ハ、これによりて次々に子孫をうまれつぎて、世中の絶ぬことなればこそ。

然までにもさばかりのひとくいさめもいはれねバこそよわりて身ひとつおくらり。
世のこゝろにもなるべきなれバ、かならずしもそれをおきて、たゞやはらかに
のみ偶ふべきやうを定め立ることハ、やがて其世の大道にして、諸人の守る
べき所の規則なり。されバ梅枝巻にも、源氏君の夕霧君を教喩
しあふなどにも、恋のことにてみだれなどいひて、禁しめおかれ
人世のさまなれバなり。されども其方の事ハ、法令の事をさだめて、万の
教誡の事に裁さるれバ、半つくして、物語ぶみハ世中のよきもあしきも
とりあつめて真情のまゝにかきてしらしむるものなれバ、さる教誡ハ教誡と
して、おのづから情のひくかたにまかせたるよしをもちゐる人を主としく、
さる教誡にハかゝはらぬなれバ、さる心して見るべきにこそ。彼是をあるよりの論ど
もに、恋のすぢなるをいとくに而て、或ハ勧善懲悪といひ、或ハ好色の誡之
などさまざまのことどもをいひたるハ、皆儒仏の書の例をもて物語をみられ

くるひごとなるよしも、又玉の小櫛に委く弁へられたれバ、彼書を見て知るべし。
此論のおもむきに云ク、かの物のあはれを見しらんと作れる物語を、教誡にとり
なすは、たとへバ花を見んとて植おきたる桜の木を伐くだきて薪に
したらんがごとし。薪ハ一日もなくてハかなはざれバ、大ぢなる物なれバ、
それハわろきにハあらねど、薪にハよき木どものほかにおほかるに、
ことさらに桜をきりてたきゞとせんハ、中々に心なきわざとぞいふべき。およそ
いはゆる儒仏の教とハ、おのづからおもむきかはりてこそあれ、物のあはれをしるを
いふとなれバ、おしひろめなバ、身をもおさめ、家をも国をも治むべき道に
もわたりぬべきなれ。人のおやの子をおもふ心をしらバ、あはれと思ひしら
バ不孝の子ハよにあるまじく、民のいたつき、奴のはたらきをあはれと思ひ
しらんにハ、よに不仁の君ハあるまじきを、不仁なる君、不孝なる子もよに
あるハ、いひもて行けバ、かの物のあはれをしらぬ故ぞかし。されバ物語ハ

物のあはれをしらせたるふみぞといふ趣をさとりて、その心をむねと
して見る時ハ、物のづから教誡にもなるべきことハ、よろづにわたりておほか
るべきを、ひたすら教誡の書ぞとのみ心得て見るときハ、中々の物
ぞこなひぞありぬべき。といひすてられたり。これまでいくつの論にて、今までの
のちうさくどもにかけても、いまだ知られぬ事なる故、此翁ぞはじめて見出
されたるにて、いとおもしろくめでたし。かゝるにつけても玉の小櫛ハ此物語
の注釈どもの中に、一きはぬけ出たる書なるを知るべし。

一部ノ大事といふ事

紫家七論に、一部ノ大事と標したる条ありていはく、冷泉院の御事、或ハ
此物語なりふかく秘したる事といひ、或ハ子細ある事と
志されたる事を秘し、或ハ此趣向の見らるゝにて、一部の物語とりてふかく見ん
まかしきことども、もしくハ作者の心を紫式部が本意をさぐる

ものといふべし。為章試ニ今案をまうけて。識者の是非をまち侍るべし。
とて。桐壺巻より次〻。帚木・若菜巻などの詳どもをひいて。此物まぎれ
の事を論じて。伊勢物語ハ二條后。後撰集ハ京極御息所。栄花物語ハ
花山女御にまでのはらぐくんで世おもうしべし。私の秘ごとにおよび
きこゆるなるべし。されど此ハいちひとつにしてかのまぎれを伝しえざるゝ。
とて。あはうし此楚の懐王晋の元帝などが事を引出て云。これ他の国
此事まてさへあるしぞ。いかんや朝廷ハ皇祚（スメガミ）のさづけさせ給ひしより
此かた。万世一系さらにまぎれなかりしとあるにかゝる。すべの世にも女御
更衣のうちに。みだせおもうしぬうちまじりて。帝系のまぎれもいでぬ
ぬべしやと。まさくおもひそうかし諷喩をうんまじハ。式部ハ女なれども。天
生質の美と学問のちからとうちあひて。識見おのづから大儒のうへ
によしといふべし。又葉大和のるハ天道好還の理をもちえしる

おのゝむかし。羅大経が筆ニ同じ。羅大経が筆にハ上ニ晋帝を論じたる。鶴林玉露の文がのあるを今ハそれより出をたるべし。此一件が
一級の大事にして。諱むる人の忌憚あるべきことなりと。といひまうし或問をまう
けて答へて云る事の中に。皇胤御一代まぎれも。左京氏藤原氏などにまぎれ
まじらんハ。吾国の御為めのうれひにして。東海をふむ魯仲連ありぬ
べし。さるを藤壺ハ源氏の母ひとく。冷泉院をうくことのふハ。誠ハあるまじき
あやまちにして。源氏姦淫の罪重しといへども。皇胤のまぎれおのれちがひて
なかりしにあらず。桐壺帝此御為にハ。正しく子なり孫なり。神武天皇の
御血脈なり。伊勢宗廟の祀をうけつぎ。天下の蒼生の主とあがむることをいふ
ぞれなるべし。それにまさる程冷泉院の御後をすてゝ。朱雀院を正統にたつへ
きなれど。いとも厳（キビ）しき筆にあらずや。そもそも一旦人倫の乱あると。長く
皇胤のまぎるゝと。いづれか重くいづれか軽かるべしや。断案をくだしがたし
といへども。臣下此ことをゆるくいはゞ。源氏の罪をもつばらするにして。皇胤のおも

国立公文書館 National Archives of Japan

ちぬることあらぬを、よくしらすべし。式部が主意也しもさもあるべし。さしあたりに用なき
ふるものか。式部が當時宮中にも披露する物語に、ねんごろなくして書べしや。
此作者諷諭によりつゝせまりていふにもしめのまぎれをあらはしめふせが
せのなべし。ようせずばかへりてたゞしからねべし、云々とて、猶くはしく
論じてあるべく、諷諭とみてこそ、猶ただを玉の小櫛に、文ことに委論じて云、冷泉院
の御よろづまぎれを諷諭にとりて、一部の大事として、そのよしを論じたるも、
なべて儒者ごゝろにして、ひたすらかゝるこゝろのふみどもに例のくあげつらふ。
物語のこゝろをしらざるものぞ。その論ずる中に、源氏の君と藤壺中宮とは
密通したるを、そのはじめにはいともやさしきさまにかきたれど、終りにはいとおそろしく
みなまぐれあやまちたりけり。とてさかえたる氣象を見よといひて、また
て諷諭にきかんとしけれども、さればにも藤壺中宮を引ていへるごとく、源氏の君
此事を後にはいとおそろしくあるまじかりける事とおもひしりたる終ひ

なげくも後もなく、朧月夜君によびて、罪のむくひといふらん。
おし藤壺中宮の此事を、いとおそろしく思ひあやまちなりしとことさら
るんあるべく、後によかれかしとことさらに書べしや。おしなべて諷諭あり
むねは一すぢはいましめなどの文ごゝろにてまつまむるにぞなりぬべき。
文みをつゞりしの中にいまとく當代の位ゆづりなひみひぬること、今ひの
ごとくなれりとおぼえ。注 ここは源氏君の御子にて、當代とは冷泉院此
此事こゝろしかの論はごとくなりしには源氏君冷泉院の御位につきたま
ひたるかにつけてはいとおそろしくまひて皇胤のみだれぬるなるを
欲するなるさまにてこそ書べきことかやうにまひのごとくかへすがへすとおぼえなむ
どは書べきものかは。なほこの物語の中のことのかぎり説どもあまたあること
なれどもかしこきすぢの事なればぞ、今はそれ論へはもとしつかふらくに
此の事、さればく諷諭といふべきにもあらざるぞ。もし此物のやぶれは古今

なくびあひたる大半ゆてあまたなれ。物語ハ物語なれバ、さる世の中此大かたゝと。
一部のたゞうとして出べきゆゑなきおぼしでまても物語にて心ぐ物語の中に此
一つの事をなでまことる。然しバ此さはいかなる事にて書なでといふにまづ藤
つぼの中宮との御事ハ上にもいへるごとく、恋の物のあはれのかぎりと深く
きこえんつくしてかくをむねとし、そハ男も女もよにたぐひなきかぎりを取りつくし
給ひつく。よろ川にすぐれて物のあはれをしりつべきどちの情かはしといひ、
文などやりとふらふべきほどにもならなる情ひどの恋にハ、殊に今一きハあはれ深きの
ふかくとある物なるよし、ことさらにしられ侍る事ゆゑになれど
もなる恋を此法方ふの人の出出でて、からぐ物のあはれ此深かるべきかぎり
をとりあつかへる物なり。さて冷泉院の御事ハ、まぎれハ源氏君の
栄えをきハめんため出るゆゑ、そハよろづ川まての物語にも、むねとして
よきさまにいふ人なく、その人此うへをいやとてハ、よにあしきよ化ての法

らんかぎりつくしていふ中に、弟のさうらふ人の世にしりすめらぬかくれなれバ、人
のおもふさひをなくて、つひによう人あまた弟となりぬる事などをいふて、物語
に多くの御まで。此物語も源氏君の栄えをきハめてかんとするに、人の
さうらふにきハまりハ帝の御位にして、執政大臣といへども、なほ人にはなき
あらねど、かなる所にも太上天皇の尊号をかうぶらしめんとするにさる
べきよしなくてハ、ゆくりなくてまづとに浅ましくやしくうすめくおぼえに
帝の御父とせん料に、此物のまぎれハ出来たるなり。そもく此君帝に
御子まて、后と大臣と御子にかちうへるうへに、帝の御父にまで、さんあるまじ
きほどよし給ひて、太上天皇になり給へるがうへにて、ぞくめでたく栄え
弟の栄えんにきハまりきる、あげく此尊号かうぶらしめん料ことといふ
あらしハ、藤壺の宮に秋居の僧此ば物のまぎれをば、かくよりしり居る
るが、みかど冷泉院へひそかに奏きんとする時の何よいたく、これハきりく

ゆくさきの太平と侍ることをもおぼしよりし院きさいの宮へもいま
世をまつりごち給ふ御門の法にあはず。すべてうつりてよろしきねがひにやあらむ。世
侍らん。かゝるおほやけしの御はからひは、あまたひらき侍りとも、何のくらゐか侍らん。
佛天の法にあるによりて奏し侍るなり。（證を云ふに書にて注ありてこの外あれど、ちかごろ今の注をみさせ、おのづから考ふべし）
かくて奏しけることをきこしめして、みかどの御位にのぼりまへる御詞よりはじめ
んとするにも、はじめておぼしゝかば、後の世まで此ごとくなるべきことをさとく
（ここにも注あり しるを今ちかづく）このことなりけるは、よろしき所のうち、文に仰せける詞に、天変をさとりにさとし、世中さかづきあるぬは
このことなりけるは、よろしき所のうち、もはや此御世よりとかくまゐるにて侍るなり
まことに（注あり ちかづく）かくて次の文によく、いよいよ位がくもんをとさせ給ひつゝ
一世の源氏、文徳天皇太臣よりおこりて、後にさしよみさかもなりて位にもつき
たまへるもあまた例ありて、人がし此かくしたことよせてさまやありつ
は、ましてよろし所にてかげしそる。秋のつきさえてし太政大臣に（なり）

給ふべきことさく（注あり ちかづく）そもそも此物のまぎれのうちに、さたぐく巻より
つぎつぎにいひ来くらよいよりて、源氏君を法位につけまゐらせんとおぼし
めしよりけるところへおしくる。次第のおもむきを能く考ふべし。
さて此君の常の事どもをきはめて書すゝむとおもへば、今一きざみをさめて帝
の御位に法をなるべきを、太上天皇にてやみぬること、但しぬしの深く
心をはらへりしのにこそ。狭衣物語に大将をつひに帝にしたるは、
此物語の源氏君をまねびて、今一きざみをすゝめて書けるもの也。かれ
大将を常の位につけさせたるによりて、何ともやまとに法ありてとめた
て、そのよしに申したくに、いふくに浅くなるに少しゆるさしと、紫式部はそこをよく思ひ
いるものゆゑ、帝の御位をぞのぼして、太上天皇もそのよしおほくては
あらけんには、相（サウ）人の相しける詞に、此はおやとなりて
帝王のかくあるべき位にのぼるべき相おはしますべき人の、そのかたにて見れば。

みづからかゝる事やありけむ。とも。はじめよりまづきこえさせ給へるをまうけ
おきてば。御のまぎれをうたて。かのしらずなる号を崇めりてはかなさぬ
さまにうちもてゆきて。藤壺にまゐりて法位につけ奉らむとはかる事に。
此君の頭に冷泉院の御むすめ。おほやけの御子たちの御中に。とりわきてれ
おもしろくおぼしき。位をゆづりきこえ給ふをば。かへりよしもなりけ
るがいたうその御心あらずもて。及ばぬきはまでの御すぢ給へし。とある。こと
帝の法位よりのがれまぬべくあるまでどれ。その一きはをぞことさらにのこ
さりといふ法くらゐの下にたてられたる詞にていたくいふかたの作り
ざまな大かたさはめのまぎれをうたてるとは。此源氏の君の栄えをさ
たまふことのみとといふこと。上件の御心むきどもをかむかへてさるべし。
なほいとゞかの猿衣は。おもひさだめても御法をまもらび給ふ。すべてづ
事のさまをとらへてある中に。大将の女二の宮にものびてきなりてうみ

給へる御子を。さうぞうしきの御心にまかして。まぎらはして後に。その御子
を東宮にすゑて奉らんといふさまにあはせたる時。天照大御神の御告によりて
法ひに此大将を位につけたるは。あやしき冷泉院の御まぎれを
まぎらはしく出る御かたを。さてまたかれ大将を位にたてけり。学者などき
ちゃんとあんなるを。此物がたりと同じ作りぬしのこゝろざしさまことなれど
またもこれをなずらへあるべきし（已上小櫛）といへれど。此二つの論いだきまし
ようしむ。皆作りぬしの心にて思へる事なりまでば。後よりおしはかりてさもあらんにてそ。
さらにいふべきよしはあらねど。既にかゝる論どもあれば。かつがつ
もらしていでおのれがおもひをもいはまうらに記しつべし。さてかの二つの
論のうちにおのれはまづ。安藤氏のいへるかたやよかりなんとぞおぼゆる。
さるはかの七論のうちなる論は。小櫛よりいはれたるごとく。全く儒者ざまよし
て。淫乱の例をあげさめて論じたる物よりは。あまりて作りぬしのこゝろ

いさゝか諷諭めきたる事もありげなるやうにおぼゆるよしもあればなり。
その故ハ。此物語よりさきだつ物語も多かれど。帝の御妻にかの
まぎれありて。その御子にまぎれする御子を。御位につけたまへり
などいふ事ハ。絶てなく。大かた此物語ぞめづらかなるべきを。但し今の世に伝はらぬ物語もありけんをしらねば。それらにハさる事もありけんハしらねども。それハさらのなきなり。
しるし。げにしく事の情(コヽロ)をおして案(オモ)ふに。作りぬし
の在世のほどよりハ。此物語もはやく宮中に流布しけるさま。かの日記に
しるく見えたれバ。人にもかつ〴〵見たりけんを。さる人も見ん
て流布せしからんにハ。帝も宮后も見ますべき物なるに。かくめづらかなる
かしこきすぢを書まじへたること。いともおほけなし。そハまさしくあるまじき
のごとく。他(アダ)し氏〳〵の世といふにハあらで。我にあづからぬ事にても守るのなるべき
を。ことに御国ハ。神代よりさらにたゞならねバ。いまもの御時よりとハかけまくども。
かしこく。ことに世の中をせめとえつくしる様なれバ。早とひ嵯峨天皇
に準(ナゾラ)へ。醍醐天皇に擬(ヨソ)へたまへるにもあれ。時のみかどの御先祖にませバ。
むかしの亂さわぎごとあるべし。そのことも此漢(カラ)國の御制(ミ)度(サダメ)ありしせすハ。
何事もよろづおほやけゝしきふなよびつゝて。きびしく咎めのふなどの事は
あるまじき時にハあらねど。御いまハ帝もことなるさん物にかくあるまじき
事どもを。かのふつく用意なかりし人の心まゝにかきたるにて。はゞかりなし。
んの庭に君などもハ。なほあるまじきなるべし。さるハ安藤氏のいへるやうなる
心なかりしかど。それハ書きこめてハいひおきけれど。大かた此一條(スヂ)のことハ。諷諭めきた
て世にある中にも。かの物語の物のまぎれハ。やゝさしく其拔(ヌケ)を示しけるにて。
そのころ世にもてはやさるゝ佛説の類によりて。因果を覿面に見せたる物
なりけむとおぼゆるまでなれど。そハかゝはらずして。深く考へとりて見ん人の心に
まかせつゝ。例の諷諭めきたる事に見えたるをあはれとさだめして。人情のゆくまゝに
見えまぎらはしきこと。やがて作りぬしの心にて。女の議論がましきを

はらあるなり。なかにも。此巻ハ桐壺巻に。世の人光る君ときこゆ。中やうさ
かゞやく日の宮ときこゆとあるに。伏案のおもむきとみえたるに。この二つを対(ムカ)へ
思ふところ事ハ此物のまぎれのうち。物がたりの中におもむきとあるなるべく。
外(ホカ)作のうちにも八皆ことゞもをまぎらはさんためにて。おやなりける物のやう
まさへしたんゆめゆめ。さることバ此巻の名ハ作らぬしの意ありし事とかん
おもひはかるべきを。いはゞなりしかるを思へるなり。今実(マコト)にハ紫式部がこたへする所。
あひていはゞんハ。しかるをさなき事バ。此物語も又その論をいはばおのづからよく
見ん人ハよく見てよくさとるべく思ふ。さてかくやうに見る時ハ。小櫛の説
ハいはずしてをかしく。ふかく味へいでて。まづ源氏君。此のことを後にハいと惣て
ろしくあるまじきこと思ひあつかひあぐらふ。其後も藤壺桐月夜君に
あひしくまで。ひし八何どかいはん。さらに。いふまでこそ。こゝまでハまこと
にさるなる事ども。あれすみハち情を本として物のあはれをむねとしける。

物語ぶりの体(スガタ)にしておのづからなることハおのれひとりのみいひなぐさむ。あやにわが
はんにもまうせらるゝおもひて。のどめがたきおもひのくるしきことゞもバ。ことゞもをかきてハ論
ぜべらしぞ。安藤氏のいへることハ。げにもつまびらかなる儒者ことに見えたれバ。
おそろしくあるまじくおもひ給ふとあるのこゝをさして。諷諭といへるハ。今おの
あらぬことなれバ。その事を弁へらるゝたるハさとるべうなれど。かくいひつめ
てハ。ことゞもまた議論といふべきさまにぞ見ゆる。すべて諷諭といふものハ。
その事をさしあてゝいふ譏諭のごとくにハあらで。たゞ作りぬしの心を
底にのみ秘(ヒメ)おくなる事バ。これをよみかくいひて。その巻々にハおもひよりがたき
いかにも巻々の例などをみていふべきにもあらねバ。たゞおもひつゞくとさとる
に跡(アト)あるわざならバ。諷諭とハいふべくもあらじ。又それとさとらせんとおもふ人に
ござ思ひましバ。外(ホカ)作の人にもそのさとらざるものなどいかであらんなれバ。さらぬ
やうにまぎらはしてさるわざをはかりし。諷諭のなさけひとつさることバ今ひとかさねてハ。

いよ〳〵あらぬ事あれど。今の世のさまとその事がらとをあひて。作りぬしの心をおして。かうもやとおもんぞ。その諷諭といふことの見やうなりける。あど事ども八。此物語の中に作りぬしの心を挾みていへるはさとつぢこしこと合せて考ふれバ。大かたしらるゝなるを。かくはなさせてさとしたるハ。それよりかゝるべき事にはあしざりし。後までもかの学者らは物語の心をいひかけるにはよりその人見えへとてあやのまゝにいひいづるなればこそなかりきよしもあしきも世にふる人のはりさま見えたるにもあらバきくにもあまる事の。後の世にも言ひつたへさせまほしき事ふしぐさをことにこそかくて。いひおきそめくるなり。とあるなど八。物語のすべてのさまをいへるなればこよなき御論にかりもいづべくや。さてまこと小説にみえたる事の中に當代のかく位よりおもひ給ひぬることを見えひのごとく書ことおぼえ。とあるをも引いでゝいへる事も。きゝおぼえ八。大かたハ人情のうらみつたて。きこゆならべたるさまのいさゝかも書きたるなれバ。證とすべき事にハあらじ。又宣長のまぎれぬるとも説をなへるさまにて書べかれどいふことにかゝれどきこゆからだやがて議論がましくなりていとある勧善懲悪などの件なるべし。諷諭と勧善懲悪とは。すなはち其方なるなるを。大かたひとつことのやうにおぼえくるあていひ来れる八。かの儒者ごとをやぶらんとそのことばなるなるをまでといふ事多かりし。細くしるぎるゝに似るゆゑ。さて文物語ハ物語なれぞ。さる世中の大かたを。一段の大事として出べきにハあらじバそくといふまゝさるもいらなばおのれ八中くに。さる世中の大事見えあらに一段の物語ハ出るものゝやうにおぼえし。さるハあ物語どもハ。さやうなるものもあるを候バいひまじるやうに一段のたすなどをこそいへべきにハあらざれど。此物語ハ一ふしやううちりなるに。此物のまぎれのうたたらかハいうくめづらかなるにて。かいせでの物語ども見れば其をうていふべきをいかゞなるべし。たゞまことに諷喩あどいへるハ。

大かた儒者たちにハおほかれど此作りぬしハからがく漢籍をよまぬ人なりければにて
あらめ。すでに文法なども漢文に似たる所ありて。おぼし物語とハこよなく
かたくるしげなるにて見えず。あながちに彼にならへるにハあらじ物語ども。さるをとおも
きびしきハ宗とめでたくやあらん。さまでこれハかの諷諭のかたにひかれてひが
んにもあらんかし。とにかくに證(アカシ)なき論なればおもひていふべくもあらず。さて文
おとなしきにかたよるあはれがちなるあひだの意にハ猶今一きハあはれの
ぬけたることある物なるにことにことばにいたりてハ一きはまさる
ことに似たれども。それまでも平がなによるべきにかく皇朝のまぎれぬならひ
ものがたりもとかくしてすずろごとも物のあはれのふかきことハいへども
あらんを猶文に此作りざまのうへにしもかきまつるハおほかるあるなめ
よむらむなれバいへば宇治の巻くなどハかくあるおぼしき平のかぎり
なべかきしるし給ふどものあはれのきはなることハ今まさるまさりて

閑かなる代ありてもおそれのかぎりハおほかたちに上なる御かたがたのうへなり
てこそ作りぬしのむねとはべりて見えんもやさしかるべくなん。さてまた
源氏君の栄花をきはめんこと余なるさまとこそいはまほしけれども猶よ
いふまでもやむごとなき人の栄花ハ帝の御位にして。執政大臣とい
へども此ぐらゐ人ハなほあらぬ所になることいふべきまでぞれもまた
半ばにしるべき。さもし他(ヒト)の國は帝などなりぬれバて帝の御父とせん
料になどいはまかせても書くべきを。ましてハかの藤壺の宮にて冷泉院の帝
の先例をかんがへさせたまふところよもあらじ。一はあるまじともあれび
てとみぞかゞりぎるいとおほかりける。日本紀ハさらに御院ナシ
うることあるなし。たとひあらんにてもやうふちのびさらんすそべ。
いかでかつへたるやうのことをせんとする。とあるごとく家仰園ハ神代より
うけたまはりてのみなる故いかに宗云(ソラゴト)物語なりきバとてかくおもひけなき

事のかゝるべしやは。さてはよくかなへたる人なりしかばこそ。かくさまざまにいへるにハ
あまさへしバいよ〳〵ことに心あるに似たり。栄えのきはみをかゝんとく。
執政太臣などに至りたりとも。そのかみのやうにて栄えのきはみとハいひ
がたくまして。何のあかぬことかハあらん。よしや帝の御位にのぼりたまひ
なかけたまふとも。かゝる事ハあるまじければ。中の定なしとても。のぼりたまふべき
やうハおほかたにいひてもあるべし。さる段かくかきなしたる事の趣ふかく。太上
天皇の尊号をたまへるやうにかきなしたるハ。子細あるべき事なりかし。
さてまづ薄雲に夜居の僧の此事を帝へ奏する所の語どもを引て。
尊号かうふらしめたまはん料といふ證（アカシ）とせらるゝハ。げに其料とは
見えたれども。これによりて。ことごと栄えをきはめんとせんの料のことハ見え
ず。さればその説と違ひをしまひする物なれど。本文のことハ異なるやうに
おのれが考ハかの奏をいひくだりにて件の説を弁ふることゝなるべし。此一條（クダリ）を

すべて源氏君の栄えをきはめんとての料ぞといはれしつまびらか。さバかり
にハ見えしまで。源氏君の栄花のさかりハ。藤裏葉巻にて。何事もみち足りの
まゝになりたる末にかへりて。其の後ハしだいにうき事どものいできてたゞおとろひ。
さて太上天皇に准へたまふ事をいひ。其次に六條院へ行幸のことある。これ
ぞ栄えのさかりのきはみをかきたてたる所とぞ見えたる。其次の若菜巻に。
四十の御賀の事の見えたるも。栄えのきはみなる事にハいへれど。かの巻に既に
女三宮の事よりぞ。物の始を書出されたるハ。柏木のおほけなきまぎれの伏案に
て。衰へにおもむく始めなれバ。此巻よりハ衰へゆくさまをかける物と見るべし。さて又
より女三宮の事いでゝ。つひに薫君生れたまひ。右衛門督うせたまひ。
落葉宮の事あるまで。皆源氏君の心をくるしめたまふ事のみなれバ。
よろこばしき事にハあらじ。さて御法巻に。紫上のかくれ給へる。
こゝに悲哀（カナシビ）のきはみなるに。幻巻ハそのかなしびのみなるさまをかゝれたれバ。

国立公文書館
National Archives of Japan

すべて源氏君のうへに、栄えたりけるをかんがんと擬(カゞ)へけるには、あまたある事をとる
ざりしなり。源氏君の栄えそのまゝ擬へんとならば、かゝるところさらにこのうす[?]
をばなちたて、雲上の事も臣下のうちにこそ、柏木のくだりもことによく
のがれまつるさまにかくべき事なるを、かくおしなしたるをもかゝるは、さるか
らね。物のまぎれ此報応(ムクイ)を示せるものなるべし。さてつひに源氏君の御栄此
栄えは、夕霧太臣のうへにとゞめ、桐壺帝の御末も、朱雀院の御子のうへに
とゞめ、致仕太臣の末は、紅梅太臣にとゞめたるも、安養氏がいへるごとく、作り
ぬしの用意ありしるかなるべし。はてまさに上天皇にてやみぬるを、
作りぬしの深くらをつけるものゝごとく、狭衣のうちを後ちうに世也[?]
といひまつるも、桐壺巻のおん人のうへも、薄雲巻の思ひのうへも、皆いて
まつるがごとくにて、治国もいふべきふしなし。但しこまでもして栄えを
きそめんとものとなるやうにいはれけるだらかはうけがたし。又此狭衣

をとりて、かの大将を位につけける事は、なずらへて栄えをきはめんとせん
ためとこそきこゆれ。されどもやうにいひまつるもいかゞ。げにかの物語は、此物語
うつせるものにて、其名をさへうつせる事勿論なれど、かの大将をつひに位に
侍らするまでも、まぎらはしけれを省(ハブ)きすてける作りぬしのさまは、ちと紀大[?]
あしぞや。そもそも氏姓(ウヂカバネ)を賜りましゝは、御臣(ミヤツコ)となり給へるものなれば、ふ
まづだ一たび氏姓を給ひても、ふたゝび皇子となりて、大臣位を嗣(ツギ)ますに
べくはあらぬことわりなるまゝに、いにしへも上つ代には、絶てあらざりける
を、後にさる例の出来しは、さるべき皇子たちのおもひしまさで、やむごと
なきのみならず、時の御なりけるを、其例を例として、いかさまにも似るべし
物語りぶみにあれば、ちからかくべきやうやはある。然までもまだあらぬ
皇子たちのおしさるなありとく、此位につかせ給ふなどあらば、それ
にては臣下に下り給へるを、かへし給ひけんにはたがひたるよしや

世人ハ、しもしたがつくりしも、天照大御神（アマテラスオホミカミ）のはじめたまへりけんとすらん。
狭衣の作者（ツクリヌシ）乃ごときをおもへるなか、ありて、大御神の御告によりて、かの
大将を帝位につけたるハ、げにいとさるべきことわりにて、此物語の天変
の事、又冷泉院の御後をうちすてたるなど、おなじく同じさまなりとて
おぼゆるなれ。されどかくやうの事どもハ、皆作りぬしの心々にて、よ
ありしなれ。誰々ハその実（マコト）を知るべくあらねバ、七論も玉の小櫛も、尤に
いとづよき論にちかく、今かく辨（ワキマヘ）いふとも、猶さて同じおしなど
となりてバ、これらハともにいとづよく、いふべくもなん。後の見ん人おのが
じゝくに心えらびて、そう孫さてまへ、此論どもをみて、かの安藤氏が説
をおふとおもふ人などあらんよ、かの諷諭のうへをなみもいそんとそこの
作りぬしの作せざる事を引あてゝ、試に論ずる數（くさ）ゞもゝれたるをも必（ズ）
あらんとおもふを、それハいとくひがことなりけれバ、さてふさひかくてことなれ。

そもそも我皇國のならはしとして、ことにかしこき御あたりにハ、やゝ
の事あらんにても、げにしくとあらはして、そのよしる事をいはぬハ、
うけてもあらぬことなるを、後世にいたりてハ、降ありてハひたすら数も出
来し、ハ皆あやしげの事のなきにしもあらずして、いともかしこき
ことなれバ、中々に此うへの事をいふべくしもあらず。されど推量（オシハカリ）のかぎりも
をいそんとなりしバ、廣道らもいと多くいふべきを、かくてのこさしおくハ、
まして大御世ぶりの御おもむけにかなひ奉るのぞかへりてもきち
さぐりえたるをもいひそへてよ。此は物によそへなどして、いふハ昔より
例あることなれバ、この作りぬしの心ありけにみゆるをバ、事のつ
いでにあげつくべきなれバ、子細ありし事なり。さんとのこしてく
あるべしとなんいふことなり。

小田中家藏圖書之記

国立公文書館
National Archives of Japan